

6/16 Mon.

非破壊検査 presents 第41回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.41, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

6/18 Wed.

第649回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.649 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
ピアノ
Piano
特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

プロコフィエフ
PROKOFIEV

プロコフィエフ
PROKOFIEV

[休憩]
[Intermission]

R. シュトラウス
R. STRAUSS

R. シュトラウス
R. STRAUSS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

反田恭平* -p.6
KYOHEI SORITA

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

交響曲 第1番 ニ長調 作品25 〈古典〉 [約15分] -p.9
Symphony No. 1 in D major, op. 25 "Classical"
I. Allegro
II. Larghetto
III. Gavotte: Non troppo allegro
IV. Finale: Molto vivace

ピアノ協奏曲 第1番 変ニ長調 作品10* [約16分] -p.10
Piano Concerto No. 1 in D flat major, op. 10

ブルレスケ ニ短調* [約17分] -p.11
Burleske in D minor

交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの
愉快ないたずら〉 作品28 [約15分] -p.12
Till Eulenspiegels lustige Streiche, op. 28

6/22 Sun.

第142回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.142 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

6/24 Tue.

第683回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.683 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
ヴァイオリン
Violin
第1コンサートマスター
First Concertmaster

スメタナ
SMETANA

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

アウグスティン・ハーデリヒ -p.6
AUGUSTIN HADELICH

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

歌劇〈売られた花嫁〉序曲 [約7分] -p.14
"The Bartered Bride" Overture

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 [約33分] -p.15
Violin Concerto in D major, op. 35
I. Allegro moderato – Moderato assai
II. Canzonetta : Andante – III. Finale : Allegro vivacissimo

交響曲 第7番 ニ短調 作品70 [約38分] -p.16
Symphony No. 7 in D minor, op. 70
I. Allegro maestoso
II. Poco adagio
III. Scherzo : Vivace
IV. Finale : Allegro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

特別協賛：非破壊検査株式会社 (6/16)

協賛：東海旅客鉄道株式会社 (6/16)

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会 (6/18)

協力：コジマ・コンサートマネジメント (6/16)、アフラック生命保険株式会社 (6/18)

※6/16公演では読売テレビの収録が行われます。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協賛：大成建設株式会社 (6/24)

協力：横浜みなとみらいホール (6/22)

6/28 Sat.

第278回 土曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 278 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

6/29 Sun.

第278回 日曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 278 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮
Principal Conductor
トランペット
Trumpet
コンサートマスター
Guest Concertmaster

ロッシーニ
ROSSINI

ヴァインベルク
WEINBERG

[休憩]
[Intermission]

サン＝サーンス
SAINT-SAËNS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

児玉隼人 -p.7
HAYATO KODAMA

石上真由子 (ゲスト)
MAYUKO ISHIGAMI

歌劇《ウィリアム・テル》序曲 [約12分] -p.18
“Guillaume Tell” Overture

トランペット協奏曲 変ロ長調 作品94 [約24分] -p.19
Trumpet Concerto in B flat major, op. 94
I. Etudes: Allegro molto
II. Episodes: Andante – III. Fanfares: Andante – Allegretto

交響曲 第3番 ハ短調 作品78《オルガン付き》
[約36分] -p.20

Symphony No. 3 in C minor, op. 78 “Organ Symphony”
I. Adagio – Allegro moderato – Poco adagio
II. Scherzo: Allegro moderato – Presto – Maestoso – Allegro

オルガン: 大木麻理
Organ: MARI OHKI

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ
(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

就任7シーズン目
更なる高みへ



©読響

第10代常任指揮者への就任から7年目を迎えた名匠。プロコフィエフ、ドヴォルザーク、サン＝サーンス、R. シュトラウス作品などを指揮し、巧みな構成力とドラマティックな表現力で読響と共に更なる高みを目指す。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれて注目を浴び、04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務めた。08年から23年夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、在任期間中には同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に度々輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場で〈ポリス・ゴドゥノフ〉、ウィーン国立歌劇場で〈ダフネ〉、バイエルン国立歌劇場で〈影のない女〉〈ダフネ〉〈ローエングリン〉を指揮するなど国際的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場の音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。今年3月には読響と〈ヴォツェック〉を披露し絶賛された。これまでに、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭のほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。今年3月にはベルリン・フィルにデビューしたほか、ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団と共演を重ねている。

6/16
大阪定期

6/18
定期

6/22
横浜マチネー

6/24
名曲

6/28
土曜マチネー

6/29
日曜マチネー

Maestro

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
文化庁
独立行政法人日本芸術文化振興会

6/16
大阪定期

6/18
定期

Artist



©Yuji Ueno

ピアノ

反田恭平

KYOHEI SORITA, Piano

クラシック音楽界に革命をもたらすカリスマ。2021年のショパン国際ピアノコンクールで第2位を受賞。25年8月にはザルツブルク音楽祭に指揮とピアノでデビューする。モスクワ音楽院を経てショパン音楽大学で研鑽^{けんさん}を積み、ウィーンで指揮を学ぶ。12年、日本音楽コンクール優勝。15年、ロシア国際音楽祭でマリインスキー劇場にデビュー以降、ベルリン・ドイツ響、ロシア・ナショナル管、ワルシャワ国立フィル、RAI国立響や国内の主要楽団などと共演。自ら創設したジャパン・ナショナル・オーケストラで全国ツアーを開催し、新レーベルNOVA Record を設立した。20年にはウィーン楽友協会にデビュー。「情熱大陸」「徹子の部屋」「題名のない音楽会」など多くのテレビ番組に出演。出光音楽賞受賞。読響とは18年から共演を重ねている。

6/22
横浜マチネー

6/24
名曲

Artist

ウィーン・フィル、ベルリン・フィルなどと共演する世界最高峰のヴァイオリニスト。1984年、ドイツ人の両親のもとイタリアで生まれ、マスカーニ音楽院とジュリアード音楽院で学ぶ。15歳の時に全身の60%にもおよぶ大やけどを負うも、20回を超える手術とリハビリ^{きょうじん}を強靱な精神力で克服。2006年インディアナポリス国際コンクールで優勝以降、ドホナーニ、マリナー、ネルソンス、プロムシュテットなど名匠の指揮で、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、バイエルン放送響、ミュンヘン・フィル、シカゴ響、ボストン響などの著名楽団と共演。ザルツブルク、ルツェルン、BBCプロムスなど音楽祭にも多数出演した。CD録音も多く、16年にはグラミー賞の「最優秀クラシック器楽ソロ」を受賞している。読響初登場。



©Suxiao Yang

ヴァイオリン

アウグスティン・ハーデリヒ

AUGUSTIN HADELICH, Violin



©Yuji Ueno

トランペット

児玉隼人

HAYATO KODAMA, Trumpet

今月16歳を迎えるトランペット奏者。2009年、北海道釧路市生まれ。5歳からホルネットを、9歳から本格的にトランペットを始める。辻本憲一に師事するほか、ベルワルツ、ナカリヤコフら著名な奏者のマスタークラスも多数受講。現在、カールスルーエ音楽大学のプレカレッジで学ぶ。24年には史上最年少で日本管打楽器コンクール（トランペット部門）第1位および文部科学大臣賞など、国内外のコンクールで優勝・受賞した。これまでに東京フィル、新日本フィル、東京響などと共演。「クラシック音楽館」や「題名のない音楽会」「EIGHT-JAM」などに出演した。24、25年度ヤマハ音楽支援制度奨学生。今年2月にCDアルバム「Reverberate」をリリースし、夏には初の全国ツアーを予定している。読響初登場。

6/28
土曜マチネー

6/29
日曜マチネー

Artist

プロコフィエフ

交響曲 第1番 二長調 作品25 〈古典〉

6/16
大阪定期

6/18
定期

Program Notes

20世紀のロシア・ソ連を代表する作曲家セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）は、若くして作曲・ピアノに才能を発揮した。その前衛的な作風はペテルブルク音楽院在学中から物議を醸^{かも}していたが、1914年に音楽院を卒業した後、セルゲイ・ディアギレフなどのつてもあり、実力は徐々に国内外に知られていった。

彼が交響曲第1番に集中的に取り組むのは1917年のことである。この年の夏、田舎町の別荘にこもり、前年までに進めていたスケッチをもとに作業を進め、とりわけフィナーレは全てを新しく書き直した。また通常とは異なりピアノを用いず、時には田舎道を散歩しながら頭の中で作曲したという。古典的なスタイルを踏襲しながらもモダンなテイストで軽妙洒脱に仕上げられた。その意図を作曲家は、もしハイドンが生きていたら、新しい風趣を受け入れながら自分の形式も維持していただろう、そんな曲を書きたかったと述懐している。

ロシア革命後、新生ソヴィエト政府により社会が急速に変わる中、プロコフィエフはアメリカにキャリアの次なる可能性を見出す。それは1918年4月21日、本作初演に来ていた教育人民委員のアナトリー・ルナチャルスキーに直訴することで実現し、世界各地を転々とする生活が始まるのである。

第1楽章 アレグロ ソナタ形式だが古典派にはない斬新なアイディアも随所に散りばめられている。

第2楽章 ラルゲット 三部形式の優雅な楽章。中間部ではファゴットと低弦のスタッカートの上を旋律がユーモラスに滑っていく。

第3楽章 ガヴォット：ノン・トロppo・アレグロ 古典派交響曲の舞曲はメヌエットを置くのが普通だが、ここではフランス起源で裏拍から始まるガヴォットとなっている。

第4楽章 フィナーレ：モルト・ヴィヴァーチェ ソナタ形式。明るく^{はつらつ}潑刺とした楽想が爽やかなクライマックスを形成する。
〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1916～17年／初演：1918年4月21日、ベトログラード（サンクトペテルブルク）／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

プロコフィエフ

ピアノ協奏曲 第1番 変ニ長調 作品10

ピアノ協奏曲第1番はペテルブルク音楽院時代の1911年から翌年にかけて作曲された。当初はもっと小規模な作品を想定していたが、作曲中に協奏曲へと発展し、プロコフィエフの支援者でもあった評論家ヴラディミール・デザルノフスキーと指揮者コンスタンティン・サラジェフがモスクワで開いていた現代音楽の演奏会で初演された。独奏はプロコフィエフ自身が担い（それはオーケストラとの初共演だった）、入念な準備もあってか大成功裡に終わった。この成功によってプロコフィエフは音楽家としての自信を強めた。

1914年の春、音楽院の修了にあたって行われたピアノのコンクールで、プロコフィエフは本作を演奏した（2台ピアノ版）。自作の演奏自体が異例だったが、本番前に楽譜を印刷して審査員に配ったことが奏功したのか高い評価を得て優勝し、卒業式では晴れてオーケストラをバックに再演している。

本作はまだロマン派の余韻も感じさせ、5曲ある彼のピアノ協奏曲の中でも取り上げられる機会は多くはないが、華やかさだけではないモダンな切れ味を持った独奏部や旋律の節回しなど、随所に後年の創作を予見させる特徴がみられる。

単一楽章だがテンポや雰囲気は頻繁に変化して、バラエティ豊かである。曲はおおよそ三つの部分からなる。ピアノと弦による勇壮な序奏で始まると、ややあってピアノが元気よく駆け出し、疾走しつつ管弦楽と火花を散らす。途中、テンポを落として新しい楽想が出るが、すぐに活気を取り戻し、冒頭の主題で最初の部分を閉じる。中間部はアンダンテ・アッサイで幻想的なノクターンといった風情である。アレグロ・スケルツァンドに入ると始めは不規則なアクセントで諧謔的な動きを見せるが、第一部の旋律などを再現しつつ徐々に勢いや密度を高め、序奏を雄大に再現し輝かしく曲を閉じる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1911～12年／初演：1912年7月25日、モスクワ／演奏時間：約16分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール）、弦五部、独奏ピアノ

R. シュトラウス

ブルレスケ ニ短調

独バイエルンの宮廷歌劇場のホルン奏者を父に持つリヒャルト・シュトラウス（1864～1949）は幼少期から才能を示し、20歳にして指揮者ハンス・フォン・ビューローに才能を認められ自作を指揮してデビュー、翌年にはマイニンゲンの宮廷歌劇場の楽長に抜擢され、作曲と指揮の両面で大活躍していく。

本作はマイニンゲンに赴いた1885年から書き始められ、翌年に完成した。当初、「スケルツォ」というタイトルでピアノの名手でもあったビューローを独奏者に想定していたが、独奏パートが技巧的すぎて演奏至難であったために、ビューローには断られた。その後本作はしばらく放置されたが、優れたピアニスト・作曲家として知られるオイゲン・ダルベールが作品を評価し独奏を引き受けたため、タイトルを〈ブルレスケ〉に変更して1890年にアイゼナハの市立劇場で自身の指揮で初演した（同時に〈死と変容〉も初演されている）。また翌年にはビューロー指揮、ダルベール独奏でベルリンでも演奏されている。

シュトラウスは保守的な音楽観を持った父の影響下から次第にワーグナーやリストら新ドイツ楽派に傾倒していく。しかし、本作はまだかつてのテイスト——とりわけブラームスを思わせる——が所々に残っている。作曲から月日がたち作風が発展・変貌する中、この作品は作曲家自身にとっても現在の自分の方向性と合わないと感じられたのかもしれない。「冗談」に語源を持つタイトルにはそんな距離感がうかがわれるが、密度の濃い書法・劇的な楽想などに瑞々しい個性が現れている。

曲はティンパニ独奏がモチーフを提示して始まる（ティンパニはこの後、全曲にわたって活躍する）。オーケストラの応答、ピアノの掛け合いなど活発な動きの中で一連のテーマが示される。ややあって勢いを減じると、ピアノがトランキロ（静かに、落ち着いて）でワルツ風の夢見るような第2主題を提示する。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1885～86年／初演：1890年6月21日、アイゼナハ／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

6/16
大阪定期

6/18
定期

Program Notes

R. シュトラウス

交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉 作品28

本作は〈マクベス〉〈ドン・ファン〉〈死と変容〉に続く4作目の交響詩である。主人公は中世ドイツのいたずら者で、その逸話の数々は民衆に広く知られている。R. シュトラウスは本作でそれまでと趣を変え、階層を超え社会を笑いで風刺するトリックスターをテーマに選んだのである。

〈死と変容〉の完成後、シュトラウスはひとたび「ティル」をオペラとして構想したが頓挫。代わりにワーグナーの影響を感じさせる吟遊詩人の英雄物語〈グントラム〉に注力するが、このオペラは成功しなかった。「ティル」は交響詩へと変更されて1895年5月に完成、その年のうちに初演された。

以下、作曲家が後に書いたコメントに基づいてストーリーを追っていこう。冒頭でヴァイオリンが奏でるテーマは「むかしむかし、一人のいたずら者がいた」というプロローグだ。続いてホルンがティルのテーマを吹くと各楽器に広まり総奏となって、クラリネットが「それは^{よこしま}邪なコボルト（精霊）だった」という意のフレーズを叫ぶ。この後、種々のいたずらが続く。

- * 馬を駆って市場の女たちを混乱させ、7マイルを駆けるという長靴ですらかる。
- * 司祭に変装して説教をして回る。だが、このような罰当たりをしているといつか破滅が訪れるという予感も抱く。
- * 騎士となって美しい娘たちを丁重に扱うがやんわり断られ、世界への復讐を誓う。
- * 俗物学者たちに難しいテーマを議論させて当惑させる。

人びとをだまして意気揚々と歌うティルだが、突然太鼓が鳴り響き、裁判にかけられ死刑を宣告されて、最後は絞首刑台上でこと切れる。エピローグとして冒頭のテーマが反復され、全曲を閉じる。

本作には「ロンド形式による古いならず者の話」という副題がついているが、ロンドとはティルのテーマが何度も回帰するという特徴を指しているのだろう。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1894～95年／初演：1895年11月5日 ケルン／演奏時間：約15分

楽器編成／フルート3、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、Dクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、ラチェット）、弦五部

6/22
横浜マチネー6/24
名曲

Program Notes

スメタナ

歌劇《売られた花嫁》序曲

“チェコ国民楽派の祖”と呼ばれるペドルジフ・スメタナ（1824～84）は1856～61年、スウェーデンで指揮者として活躍し、帰国後は、オーストリア帝国の支配からの独立の気運が盛り上がる中で、民族主義的な音楽の主導者となった。そこで、自らが創設を推進した国民劇場のために、これまでなかったチェコ語による民族的なオペラの創作を企図し、最終的には8作を完成した。そのうち、最初にして最大の成功を収めたのが、第2作の《売られた花嫁》だ。

このオペラは、1863年から66年にかけて作曲され、プラハの国民仮劇場で初演された後、1870年の改訂を経て、全3幕の現形となった。ちなみに17歳年下のドヴォルザークは、スメタナ自身の指揮による初演の際にヴィオラを弾き、少なからぬ影響を受けている。本編は、農家の娘マジェンカと恋人イェニークが、妨害や勘違いの末にめでたく結ばれるという、チェコ・ボヘミア地方の農民社会を舞台にしたコメディータッチの物語。音楽にも民俗舞曲や民謡の要素が多く取り入れられている。なお序曲は、1863年に完成され、同年11月にピアノ版で初演されたとの説もある。

序曲は、ヴィヴァチッシモ、ヘ長調。勢いよく出される導入主題に、力強く刻まれる第1主題、シンコペーションが特徴的な第2主題を加えたソナタ形式で書かれており、オーボエによる叙情的な主題などもまじえて、活気に満ちた音楽が繰り広げられる。絶え間なく続く細かな動きが際立ったこの曲は、オーケストラ——特に弦楽セクション——の力を発揮するにふさわしく、同様の要素をもったモーツァルトの《フィガロの結婚》、格林カの《ルスランとリュドミラ》と共に、快速序曲の代表的存在ともなっている。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1863～66年（オペラ全曲）／初演：1866年5月30日、プラハ／演奏時間：約7分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

チャイコフスキー

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35

ロシアの巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）が残した唯一のヴァイオリン協奏曲。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの各曲と共に当ジャンルの代表作となっている。

1878年春、前年の結婚破綻による神経衰弱をスイスのレマン湖畔にあるクラランで癒やしていたチャイコフスキーは、若手ヴァイオリニスト、コーテクに紹介されたラロの《スペイン交響曲》（内容は華麗なヴァイオリン協奏曲）に刺激を受けて構想が湧き上がり、わずか1か月ほどで本作を完成させた。そしてロシアの第一人者レオポルド・アウアーに初演を依頼したが、「演奏不能」との理由で拒否されてしまう。しかし、ロシアのドイツ系奏者アドルフ・ブロツキーの尽力により、3年後の1881年12月にウィーンでの初演が実現。当地の大批評家ハンスリックから「悪臭を放つ音楽」と酷評されたものの、ブロツキーが積極的に紹介し続けた結果、大きな人気を獲得し、ついにはアウアーも進んで演奏するようになった。

曲は、情熱と哀愁に満ちた聴き応え満点の音楽。協奏曲としては民俗的な情緒が際立ち、チャイコフスキーならではの旋律美も魅力をなしている。重音その他ヴァイオリンの技巧的な見せ場も多い。

第1楽章 アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ のびやかでスケールの大きな第1主題と叙情的な第2主題を軸に、華やかさと哀感が交錯しながら進行。技巧的なソロが縦横に展開される。

第2楽章 カンツォネッタ：アンダンテ 愁いをたたえたト短調^{かんじょ}の緩徐楽章。弱音を付けたヴァイオリンによる甘美な歌が綿々と続き、中間部ではやや明るめの曲調に変わる。切れ目なく次楽章へ。

第3楽章 フィナーレ：アレグロ・ヴィヴァチッシモ 躍動的な終曲。ロシアの舞曲トレバック風の歯切れ良い第1主題と、若干テンポを落として奏されるやはり民俗舞曲風の第2主題を軸に、熱狂的な展開を遂げる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1878年／初演：1881年12月4日、ウィーン／演奏時間：約33分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

6/22
横浜マチネー6/24
名曲

Program Notes

6/22

横浜マチネー

6/24

名曲

Program Notes

ドヴォルザーク

交響曲 第7番 二短調 作品70

チェコの国民主義音楽の大家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、1878年作の〈スラヴ舞曲〉第1集で名を上げ、1881年初演の交響曲第6番で、国際的な名声を高めていった。そうした上昇期の1884年3月、ロンドンのフィルハーモニー協会の招きで、初めてイギリスを訪問。自作を指揮し、圧倒的な支持を受けた。その結果、彼はフィルハーモニー協会の名誉会員に選ばれ、協会から新たな交響曲を依頼された。そこで生まれたのがこの第7番である。ちなみに、彼は生涯に9回もイギリスを訪れることになる。

本作は、1884年12月13日に着手され、翌85年3月17日に完成。同年4月ロンドンで自身の指揮により初演され、大成功を収めた。さらにビューロー、リヒター、ニキシュ等の大指揮者が相次いで取り上げ、急速に普及していった。

折しもドヴォルザークは、イギリス訪問直前の1883年12月、ウィーンでブラームスの交響曲第3番の初演を聴いて多大な刺激を受けていた。これと相まって本作は、第6番までの交響曲とは違った緊密な構成と強い表現力をもつ、劇的な作品となっている。彼の音楽に通底するボヘミア情趣も、普遍的な交響曲様式の中に絶妙なバランスで融合し、絶対音楽としての完成度の高さにおいては、民俗色が濃い第8番や第9番を凌ぐ作品とも称されている。

第1楽章 アレグロ・マエストロソ 暗く不安げな第1主題と牧歌的な第2主題を軸に運ばれる、悲劇性を帯びた音楽。

第2楽章 ポコ・アダージョ クラリネットが出す平穏な主題に、ホルンが出す優しい主題等が交わる、へ長調の緩徐楽章。

第3楽章 スケルツォ、ヴィヴァーチェ ボヘミアの舞曲フリアント風の主部に、若干テンポを落とした明るめの中間部が挟まれる。

第4楽章 フィナーレ：アレグロ 冒頭の悲劇的な主題を軸に展開される力強いフィナーレ。民謡風の流麗な主題が気分を変える。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1884～85年／初演：1885年4月22日、ロンドン／演奏時間：約38分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

6/28

土曜マチネー

6/29

日曜マチネー

Program Notes

ロッシーニ

歌劇〈ウィリアム・テル〉序曲

19世紀イタリアの作曲家ジョアッキーノ・ロッシーニ（1792～1868）は、18歳で最初のオペラを発表し、1813年にヴェネツィアで初演された歌劇〈タンクレーディ〉と〈アルジェのイタリア女〉によって一躍注目される存在となった。さらに快進撃は続き、ロッシーニのオペラで最も人気の高い〈セビリアの理髪師〉（1816年ローマ初演）など、次々と成功を収めた。その人気は国外にも広く知られ、ウィーン、パリ、ロンドンの各都市の歌劇場でもロッシーニ旋風を巻き起こした。その後、パリに移り住み、最後の歌劇となった〈ウィリアム・テル〉は、1829年8月にパリのオペラ座で初演され、大成功を収めた。

台本は、ドイツの詩人、劇作家シラーによる同名の戯曲をもとにフランス語で作られた。舞台は14世紀初頭のスイス。オーストリアの圧制に苦しむスイス国民と、独立への道を拓こうとするウィリアム・テルの活躍が描かれる。1828年春に作曲が開始され、途中、歌劇〈オリエ伯爵〉作曲のために中断したり、検閲官から台本の改作を命じられるなどしたが、筆の速いロッシーニは、翌年7月に全4幕のグラント・オペラ（19世紀初頭のフランスで流行した長大で壮大な、バレエなどスペクタクルな要素を含むオペラ）を完成させた。

幕開けに演奏される序曲は、自然を描写した4つの部分から構成される。「夜明け」（アンダンテ）は、5人のチェロ独奏のアンサンブルで静かに始まり（そこに加わるのはティンパニとコントラバスのみ）、「嵐」（アレグロ）では、風が強く吹き荒び、暴風雨となる。イングリッシュ・ホルンによるスイスの羊飼いの歌を模した旋律がフルートで華やかに彩られる「牧歌」（アンダンテ）を経て、高らかなファンファーレからおなじみの「スイス軍の行進」（アレグロ・ヴィヴァーチェ）に入る。強弱の対比を明確に示しながら高揚し、華々しく結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1828～29年（オペラ全曲）／初演：1829年8月3日、パリ／演奏時間：約12分
楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

ヴァインベルク

トランペット協奏曲 変ロ長調 作品94

近年、再評価が進むポーランドの作曲家ミェチスワフ・ヴァインベルク（1919～96）の人生は、苦難と波乱に満ちていた。ワルシャワのユダヤ人家庭に生まれ、1939年にナチス・ドイツがポーランド侵攻に及ぶと、ソ連領のミンスクへと逃げ、タシケントに移住した。ワルシャワで別れた家族は強制収容所で亡くなり、ひとり生き残ったヴァインベルクは、43年、ショスタコーヴィチに誘われてモスクワに移り、13歳年上の作曲家と互いにスコアを見せ合うなど親しく交流した。それゆえなのかスターリン支配下の最後の5年間（1948～53年）は、厳しく監視され、複数の作品が演奏禁止の通告を受け、53年に逮捕された際は死をも覚悟した。それでも創作への情熱は衰えず、7曲のオペラ、20曲を超える交響曲、多数の室内楽曲、映画音楽など非常に多くの作品を残した。

トランペット協奏曲は、超絶技巧を誇る、ポリショイ劇場の首席トランペット奏者ティモフェイ・ドクシツェル（1921～2005）のために1967年に書き上げられた。各楽章にタイトルが付され、第2、第3楽章は続けて演奏される。独奏トランペットは縦横無尽の活躍をみせ、多彩な打楽器を含むオーケストラの独特の響きやシニカルなユーモアは、敬愛するショスタコーヴィチの作品を思わせる。

第1楽章「エチューズ」 アレグロ・モルト 半音階的なモティーフが反復する第1主題、ギャロップ風の軽快な第2主題が展開する。独奏トランペットとオーケストラの掛け合いが絶妙だ。**第2楽章「エピソード」** アンダンテ 複数の特徴的なエピソードが交替する。内省的で不安な影をおとす。**第3楽章「ファンファーレズ」** アンダンテ～アレグレット 鐘の音に続き、過去の作曲家がトランペットのために書いたファンファーレが様々なかたちでコラージュされる。マーラーの交響曲第5番、メンデルスゾーン（結婚行進曲）、リムスキー＝コルサコフ、ストラヴィンスキー、ビゼーの〈カルメン〉等の旋律が登場、第1楽章の主題も現れる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1966～67年／初演：1968年1月6日、モスクワ／演奏時間：約24分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3（エスクラリネット持替、バスクラリネット持替）、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、タムリン、シロフォン、ヴィブラフォン、鞭、ウッドブロック、銅鑼、鐘）、ハープ、チェスタ、弦五部、独奏トランペット

6/28

土曜マチネー

6/29

日曜マチネー

Program Notes

6/28

土曜マチネー

6/29

日曜マチネー

Program Notes

サン＝サーンス

交響曲 第3番 ハ短調 作品78〈オルガン付き〉

フランスの作曲家カミーユ・サン＝サーンス(1835～1921)の交響曲第3番は、ロンドンのフィルハーモニック協会の依頼で作曲された。当初は楽器編成にオルガンを入れる予定はなかったが、初演されるセント・ジェームズ・ホールのオルガンを以前弾いたことがあったサン＝サーンスは、その音色を楽曲に生かすことを思いついた。全体は、二つの楽章で構成され、それぞれが前半後半二つの部分に分けられる。4楽章制の交響曲の内容を含み込み、オルガンはその区切りの部分で厳かにかつ華やかに登場する。さらにこの曲では、動機や旋律素材を循環させて全体の統一を図る手法がとられている。これは、セザール・フランクのヴァイオリン・ソナタ(1886)や交響曲二短調(1888)でのちに注目される循環形式を先取りするものといえるだろう。サン＝サーンスが「私のすべてを注ぎ込んだ」と語る交響曲は、作曲者自身の指揮で初演され、大きな成功を収めた。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・モデラート ゆるやかな序奏に続いて、ざわめくような第1主題が静かに始まる。この主題に含まれる動機から作られた循環主題が提示された後、甘美な第2主題が現れる。第1主題と循環主題が展開され、オルガンの厳かな響きで後半部(ポコ・アダージョ)に入る。ここは4楽章制の交響曲の緩徐楽章^{かんじょ}に当たる部分で、美しい音楽がじわじわと広がる。

第2楽章 アレグロ・モデラート～プレスト スケルツォ楽章の性格をもつ、快活で強烈な前半部は、二つの部分が交替する。ピアノの軽やかなパッセージも印象的である。後半部(マエストロ～アレグロ)は、オルガンのハ長調の主和音の堂々とした響きに導かれる。フーガ的な導入から循環主題をもとにした第1主題と表情豊かな第2主題が展開され、管楽器が活躍するコーダで華やかに結ばれる。

(柴辻純子 音楽評論家)

作曲：1885～86年／初演：1886年5月19日、ロンドン／演奏時間：約36分

楽器編成／フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル)、4手ピアノ、パイプオルガン、弦五部